

## ナスカの地上絵の鳥を鳥類学の観点からはじめて同定

～地上絵制作の謎の解明への貢献に期待～

### ポイント

- ・ナスカの地上絵にナスカ周辺に生息しないペリカン類とカギハシハチドリ類を確認。
- ・「コンドル」や「フラミンゴ」とされた地上絵は、これらの分類群とはみなせないことを確認。
- ・周辺に生息しない鳥を描いていたことは、制作目的の点から地上絵の謎の解明への貢献に期待。

### 概要

北海道大学総合博物館の江田真毅准教授らの研究グループは、鳥類学の観点からナスカの地上絵に描かれた鳥を同定\*<sup>1</sup>しました。鳥類は、ナスカ台地の地上絵に最も多く描かれた動物です。しかし、その同定は図像の全体的な印象やわずかな特徴に基づくのみで、十分な研究がなされてきませんでした。

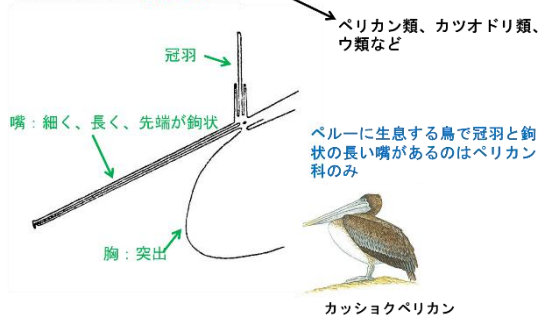
鳥類形態学の観点から地上絵の鳥を同定した本研究では、ペリカン類とカギハシハチドリ類というナスカ周辺に生息しない鳥が描かれていたことがわかりました。一方、有名な「コンドル」などの地上絵はそのように同定する根拠に乏しいことがわかりました。ナスカ周辺に生息しないペリカン類とカギハシハチドリ類が描かれていたことは、地上絵の制作目的と密接に関わることが考えられます。

今後、ナスカ期の彩色土器に描かれた鳥や、宗教施設で捧げられた鳥と比較することで、地上絵に描かれた鳥類の同定が進むとともに、なぜ鳥類の地上絵が他の動植物に比べて多数描かれたのか、さらに、そもそも地上絵は何のために描かれたのかなどの謎にも迫れると期待されます。

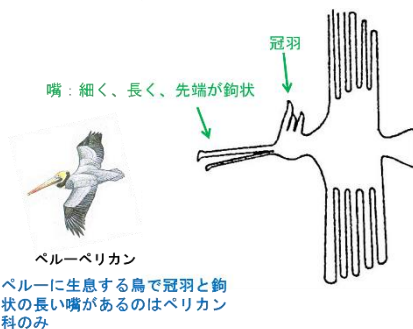
なお、本研究成果は、2019年6月20日(木)オンライン公開の Journal of Archaeological Science Reports 誌に掲載されました。

また、本研究は文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)「アンデス比較文明論」(課題番号 26101004, 研究代表: 山形大学教授・坂井正人)の助成を受けて行われました。

地上絵番号: PV68A-GF3  
従来の同定: “グアノ鳥”  
検討結果: **ペリカン科**



地上絵番号: PV68-GF1  
従来の同定: 鳥類  
検討結果: **ペリカン科**



ペリカン類と同定できた地上絵

## 【背景】

ナスカの地上絵は、ペルー南部の海岸から内陸に約 50km の砂漠台地に描かれており、パラカス期後期 (2,400~2,200 年前) からミドルホライズン (~10 世紀) あるいはイカ期 (~16 世紀) に作られたとされています。直線、幾何学図形、動植物の図像が 2,000 点以上確認されており、『ナスカとパルパの地上絵』(Lines and Geoglyphs of Nasca and Palpa) としてユネスコの世界遺産 (文化遺産) に登録されています。これらの巨大な地上絵が何の目的で描かれたのか、またそのモチーフは何かなどはよくわかっていません。その最大の理由は、プレ・インカ期の文化には文字がなかったためです。地上絵の制作目的については、先コロンブス期の道であったとする説や、パフォーマンスの舞台であったとする説、農耕儀礼に関わるものであったという説や、天文暦であったとする説、さらには宇宙人との交信に関わるものであったとする説まであります。世界遺産保護のためにペルー文化庁がユネスコに提出した報告書によれば、ナスカ台地に描かれた動植物の地上絵でもっとも多いのは鳥類で、16 点が知られています。これらの地上絵は主にパラカス期後期からナスカ期(約 2,400~1,300 年前)に制作されたものと考えられています。鳥類の地上絵は、これまで図像の全体的な印象や、ごく少数の形態的な特徴を根拠に同定されてきました。

しかし、同様な特徴が他の分類群に認められないか、また同定の根拠とした以外の特徴が同定された分類群と合致するかはほとんど検討されてきませんでした。

## 【研究手法】

ナスカ台地に描かれた鳥類の地上絵 16 点を研究しました。各図像の形態的特徴を可能な限り抽出し、現在ペルーに生息する鳥の形態的特徴と比較して同定しました。

## 【研究成果】

形態的特徴から同定できた地上絵は 16 点中 3 点で、ペリカン類 2 点 (p1 図)、カギハシハチドリ類 1 点 (図 1) が確認されました。これらの分類群はともにナスカ台地周辺には分布していません。ペリカン類はナスカ台地から約 50km 離れた海岸部に、カギハシハチドリ類はアンデス山脈の東側あるいは北側のアマゾニア地域に分布しています。

一方、「コンドル」や「フラミンゴ」と呼ばれる著名な地上絵は、ともに形態的特徴が一致せず、これらの分類群とはみなせないことが明らかになりました (図 2)。ナスカ台地周辺に生息するアンデスコンドルやキバシヒメバト、フタオハチドリなどの鳥ではなく、これらの外来の鳥が描かれた背景には、地上絵が描かれた目的が密接に関わっていると考えられます。

また、ナスカの地上絵に描かれた鳥類のほとんどで下肢が明瞭に描かれていました。飛翔中の鳥類は、通常下肢を体の下に畳み込んで、空気抵抗を小さくします。地上絵の鳥のように下肢を外側に広げたり、下方に垂らしたりするのは、着陸の際などに空気抵抗を高め、飛行速度を落とすときに限られます。着陸しようとする鳥を描く意図があったのか、あるいはデザイン上、下肢を明瞭に表現する意図があったものと推察できます。

## 【今後への期待】

ナスカ期の遺物として、地上絵のほかに鮮やかな色彩を用いて様々な鳥類を含む動植物を描いた彩色土器や鳥形の器のあることが知られています。これまでの研究によれば、土器に描かれた鳥で最も多いのはハチドリ類であるものの、ハチドリ類の中にカギハシハチドリ亜科が含まれているかどうかは検討されていません。またハチドリ類に続くのが、アマツバメ類、サギ類、カモ類で、ペリカン類

はごく稀にしか描かれていません。ハチドリ類とペリカン類以外の分類群は地上絵では確認されておらず、大きな違いが指摘できます。さらに、地上絵の近傍にある同じくナスカ期のカワチ神殿遺跡からは、宗教儀礼の供物とされる羽毛まで残存した大量の鳥類遺体が出土しています。今後、地上絵に描かれた鳥類、彩色土器に描かれた鳥類、儀礼で捧げられた鳥類の分析結果を比較・統合することで、地上絵に描かれた鳥類の分類群を同定するだけでなく、なぜ鳥類の地上絵が他の動植物に比べて多数描かれたのか、さらに、そもそも地上絵は何のために描かれたのかなどの謎にも迫れると期待されます。

## 論文情報

論文名	Identifying the Bird Figures of the Nasca Pampas: An Ornithological Perspective (ナスカ台地の鳥類図像の鳥類学的観点からの同定)
著者名	江田真毅 <sup>1</sup> , 山崎剛史 <sup>2</sup> , 坂井正人 <sup>3</sup> ( <sup>1</sup> 北海道大学総合博物館, <sup>2</sup> 山階鳥類研究所自然誌研究室, <sup>3</sup> 山形大学文学部)
雑誌名	Journal of Archaeological Science: Reports (考古学の専門誌)
DOI	10.1016/j.jasrep.2019.101875
公表日	2019年6月20日(木)(オンライン公開)

## お問い合わせ先

北海道大学総合博物館 准教授 江田真毅 (えだまさき)

T E L 011-706-4712 F A X 011-706-4029 メール edamsk@museum.hokudai.ac.jp

## 配信元

北海道大学総務企画部広報課 (〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目)

T E L 011-706-2610 F A X 011-706-2092 メール kouhou@jimuhokudai.ac.jp

## 【用語解説】

\*1 同定 … 生物の分類上の所属や種名を決定すること。

## 【参考図】

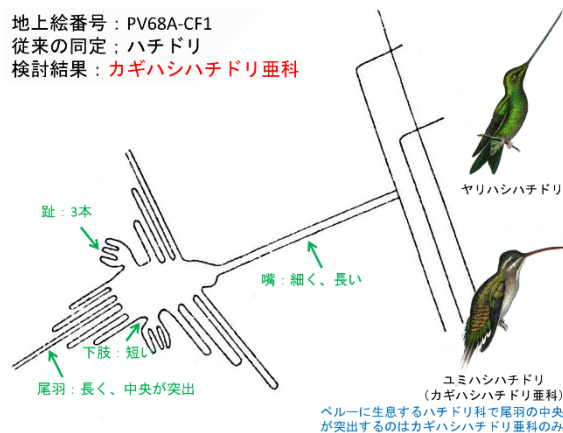


図1 カギハシハチドリ類と同定できた地上絵

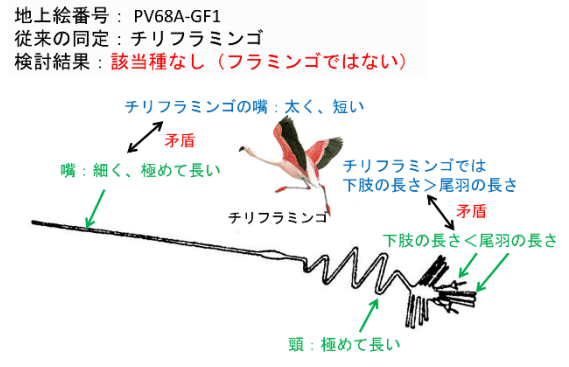
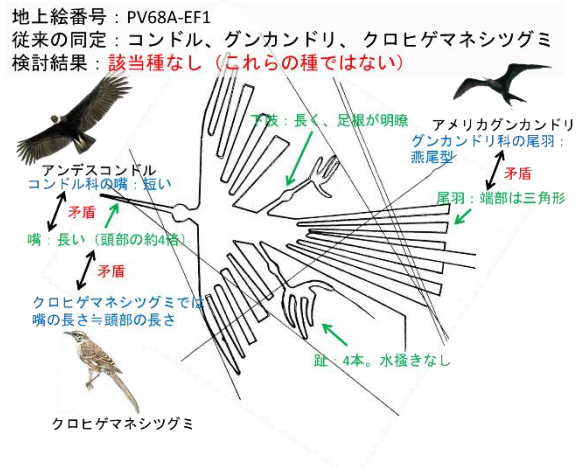


図2 同定できなかった著名な地上絵

使用した現生鳥類のイラストは、全て Schulenberg et al (2010; Birds of Peru (Princeton Field Guides))より引用